



第九卷第二號

冬の山里

S K 生

峰の木枯音さむみ

いろくの草枯れはて、

軒端の小川のこほりそめ

山田そよく夕風に

とふ人もなき山里に

身を活されず安らかに

我はいねまし草の床に

名懸位なうち忘れ

濁る世歎きやみはて、

神の御膝にねむらんと

越方徳へはほのくると

枯野の草をやきすて、

花咲き匂ふ山里の

胸のほのほは消うせて

行末ぞろろしのぶれば

ふくろ鳴く聲うら寒み

木の葉ひらく舞落つ

虫の啼く音も絶ぬらし

襦袢の少女ひびに泣く

なびくや茅屋の薄烟

誰がすむらん世の塵に

草の蔭に夢あたくかく

心きよらにいつまでも

自然の神の膝のべに

戀も望もたへぬれば

思へと心くるふかな

もゆる胸の思ひこそ

小川の氷をときげさめ

夢の跡こそ荒野原

はだへ冷たく聲ゆかな

薄にそよぐ風白く

雪かみぞれか頬のへに